# 表紙デザインについて

馬場美樹子、馬場嘉信

この雑誌の創刊前に、与座範政先生は、著者の一人（馬場美樹子, MB、当時九州大学理学部の事務官であった佐藤美樹子）に、本誌の表紙を作製するように依頼された。これは、もともと表紙デザインを公募するはずが、時間が足りずに、石橋信彦先生の御提案で、与座先生が表紙デザインをできる人を捜すことになり、絵を描くのが好きだった MB に白羽の矢が立ったとのことである。当時は、現在の Journal of Flow Injection Analysis が学術誌の役割を果たし、これ以外に会誌として FIA も創刊される予定であり、両者の表紙を考案するようにとのことであった。依頼された MB は、当時、大橋茂先生のもとで博士課程の学生であった著者の一人（馬場嘉信, YB）に、図案になるような FIA のデータを出してくれるように依頼した。私たちが、九州大学理学部大橋研究室に在籍した期間（1980 年代前半）は、大橋研での FIA 研究の発展期で、スタッフ・学生ともに、FIA の研究に邁進していた。このような時期に、Ruzicka 先生と Hansen 先生による世界で最初の FIA の単行本が 1981 年に出版された。また、同年には、Ruzicka 先生が研究室を訪問し、スタッフ・学生と意見を交わす機会を得た。Ruzicka 先生らの本・論文の図が非常に素晴らしいと以前から感じていた YB は、彼等の本や論文の中から、表紙のヒントになるような図を探すことにした。Ruzicka 先生が来日された折りに、このことを尋ねると、専門のデザイナーに本・論文の図を作らせているとのことであった。当時、デザインの能力の希薄な学生達が、必死になって論文の図を作製している私たちの状況とかなり違っているものだなと感じた。Ruzicka 先生の本の図のなかでも、最も FIA らしく、最も印象に残るものとして、現在の本誌の表紙のデータを選び、同様な結果が出るように実験を行った。もう、どんな実験をしたのかは忘れてしまったが、手作りの FIA 装置で、何とか表紙のデザインになりそうなデータを出すことが出来た。このデータが出たときに、YB は、『こんな素晴らしいデータは、なかなか出せるものではない』と、MB に自慢しながら、デザインを頼んだそうである。MB の当時の記憶は、YB がこのデータを自慢したことだけだそうであるが、YB はこのことは忘れていた。このデータをもとに、何種類かの色を使って、数種類の表紙案を作製し、石橋先生と与座先生に提出した。そ

の中から、石橋先生が現在の本誌の表紙を選ばれて、現在に至っている。会誌の表紙は、本誌のようなデザインではなく、FIA の太い字のみのものであった。2 年目から、学術誌と会誌が合冊になり、現在の形になったので、FIA の表紙は 1 年のみのものであったが、その後、廣川書店から出版された『ラボ・オートメーション図説フローインジェクション分析法』高島良正・与座範政編の表紙の原案となった。

本文の執筆にあたっては、当時の記憶をひもとくために、与座先生から資料や御意見をいただきました。この場をお借りして、感謝申し上げます。